



海外で活躍する建設コンサルタント技術者が、独特の目線で各国を紹介するコーナーです。

OVERSEAS

Republic of Palau

— パラオ共和国 —

海外事情



パラオ滞在記



三好 博文 MIYOSHI Hirofumi
株式会社建設技研インターナショナル
環境部

国内建設コンサルタントから海外開発コンサルタントに社内研修生として出向し、約3年が経過しました。その間、パラオ共和国での廃棄物最終処分場の建設プロジェクト（無償資金協力事業）で同国に滞在しました。

パラオ共和国

パラオは国土面積488km²（屋久島とほぼ同じ）、人口約2万人の小さ

な島国です。ミクロネシア地域、東経131～135度の赤道付近（フィリピンの西、高知県の南）に位置し、日本との時差はありません。火山島や隆起サンゴ礁など約200の島嶼から成り、海洋性の熱帯性気候に属し、年降水量は3,000～4,000mm（日本の平均降水量は約1,700mm）と非常に多く、年平均気温は25～27℃の常夏の国となっています。

パラオではサンゴ礁をはじめとす

る豊かな自然が貴重な観光資源となっています。透明度が高く美しい海には、世界有数のダイビングスポットや白砂浜のビーチがあり、世界中の観光客を楽しませています。遊覧飛行のセスナから見たパラオの島々の風景はとても美しいものでした。

街は小さいながらも、観光地としてレストラン（日本料理、インド料理、タイ料理、ベトナム料理、中華料理など）が多くあり、食事に困ることはありません。特に日本人にとって、パラオは非常に魅力的な観光地となっています。

パラオの自然を満喫

パラオ人は海で遊ぶことを好み、個人ボートを所有している家も多くあるようです。滞在中は業務のクライアントに誘われてパラオの海に遊びに行きました。ミルキーウェイ、ロングビーチ、セブンティアアイランド、ナチュラルアーチなどの観光スポットやセメタリー、ソフトコーラルなどのシュノーケリングポイントへ、クライアントが所有する6人乗りのボートで一日がかりで案内してくれま



写真1 セスナから見たパラオの島々



写真2 パラオの海で泳ぐ



写真3 ボートで島巡り

した。

透明度が高く美しいパラオの海で泳ぎ、昼食には釣れた魚の刺身やグリル、現地食であるタロイモ、鶏の蒸し焼きが振る舞われました。絵に描いたような南の島の砂浜や、目の前を泳ぐナポレオンフィッシュに非常に感動しました。ただ、一日海の上にいたため日焼けで大変なことになりました。遊びに行かれる方は日焼け対策を十分にされることをおすすめします。



写真4 海での昼食



写真5 プロジェクトサイトからみつけた戦争遺物（対空砲）

戦争の爪痕

第一次大戦後から日本の委任統治領だったパラオは、第二次世界大戦で激戦地のひとつとなりました。1944年の「ペリリュー島の戦い」においては、多くの日本軍の戦死者を出した場所でもあり、島内には多くの戦争遺物がみられます。処分場計画地は旧日本軍の防空施設だったようで、多くの弾丸、対空砲及び防空壕が確認されました。それらの弾丸と対空砲は戦争遺物として、今後建設される処分場に展示されることになっています。

ちなみに、パラオの現地語として「大丈夫」「つかれなおす（ビールの意）」など日本語が使われていることが知られていますが、実はスペイン語の言葉も多くあり、イントネーシ

ョンはドイツ語に近いそうです。これは、16世紀からの植民地や統治の歴史（スペイン、ドイツ、日本、アメリカ）により生じたからといえます。戦争遺物を多く残してしまった日本ですが、幸いにもパラオは非常に親日的で、日本人は歓迎されることが多いようです。

ごみ問題への先進的な取り組み

貴重な観光資源である豊かな自然を守るため、パラオでは環境保全活動や廃棄物管理について先進的な取り組みが行われています。

過去には、パラオ最大の島であるバベルダオブ島周回道路の建設時に大量の赤土が海洋に流出し、大きな環境問題が発生したそうです。これらのことを教訓として、私が携わったプロジェクトを含め、公共工事は環境保護委員会の監督の下

で、濁水防止措置を講じるなどの厳格な環境指導が行われています。

廃棄物管理の先進的な取り組みとして、不法投棄に対する厳しい罰則の他、人口の約7割が生活するコロール州でのリサイクルセンターの運営が挙げられ、これらの取り組みは太平洋諸島地域のモデルとなっています。リサイクルセンターでは、空き缶やペットボトルの回収事業（デポジット制）、剪定ごみ等由来のコンポスト化、廃ガラスを利用した工芸品の作製等を行っています。この運営にも日本のODA（Official Development Assistance：政府開発援助）が活用されています。



写真6 コロール州のリサイクルセンター



写真7 リサイクルセンターでのガラス工芸品の作製

ひっ迫する最終処分場

パラオには国営の処分場がありますが、既に廃棄物の埋立容量は限界を越えており、土堰堤の嵩上げを行いながら延命化を図っています。この処分場は観光港に隣接しており、処分場に登ると、きれいな海と悪臭を放つ廃棄物の対比が不思議な光景となってみられます。

新しい衛生的な処分場の建設は必要不可欠なものであり、今回の日本の無償資金協力事業はパラオ政府より非常に感謝されています。

このような処分場がひっ迫する状況や不法投棄対策は、他の多くの途上国でも同様であり、処分場をはじめとした廃棄物管理施設が、今後更に必要とされています。



写真8 既存処分場の風景

最終処分場建設工事

パラオ政府の要望に応え、日本は無償資金協力事業として、今後20年以上にわたり廃棄物の受け入れが可能な処分場の建設を行うことになりました。

私はこのプロジェクトの主担当として調査・設計・入札業務を実施しました。現在は施工業者が決定し、2020年夏の竣工を目指して建設工事の段階に入っています。私もスポ

ット施工監理者としてしばらく現場に滞在しました。施工現場は丘陵地にあり非常に眺めは良いのですが、日中は非常に暑く、現場を歩くと汗が滝のように吹き出します。

現地の地盤はシルト分を多く含む赤土で、雨が降るとぬかるみが発生し、場内のダンプ等の運行が難しくなってしまう、施工が滞る場合があります。前述したように雨が非常に多いため、6~8月とされる雨期に工事が遅れないよう、機械台数の確保などの降雨対策を行っています。

なお、パラオはアメリカへの渡航がビザなしで可能なため、多くの若者が職を求め海外に出ています。そのため、国内の労働力は海外からの移住者が担っているという側面があり、現地サブコントラクターの作業員の人数構成はパラオ人、フィリピン人、バングラデシュ人が同数程度となっています。また個人的には、パラオ人はマイペース、フィリピン人は陽気で器用、バングラデシュ人は素朴で一生懸命という印象を受けました。



図1 最終処分場の完成イメージ

現在、日本の施工業者を含む全員の努力の下で、安全第一として工事を進めています。毎朝の朝礼では、安全スローガン「Safe for You, Happy for Family !!」が響いています。

貴重な経験

パラオ滞在では、パラオの美しい自然や親日的なパラオ人、そしてクライアントや建設現場での様々な方との交流などが、全て新鮮で楽しいも

のになっています。海も良かったですし、滞在先のアパートから見る夕日も気に入っています。本業務を通じてODA事業の実際を体験する貴重な経験となっています。

また、廃棄物管理業務は現在多くの途上国にとって重要な課題となっており、今後は更にその必要性が増してくることが実感できました。

現在途上国は著しい発展を遂げており、対等なビジネスパートナーとなる日は近く、近い将来に、ODA事



写真9 現場より筆者



写真10 朝礼



写真11 滞在アパートから見るパラオの夕日